

# 久田 恵さん

(ノンフィクション作家)

## 居心地のいい場所づくりは自らの手で

—— サービス付き高齢者向け住宅に移住して

「介護」という言葉を聞かない日はない。そして関わる人すべてがいろいろな問題を抱えている。自ら両親を介護した経験を持つ久田さんの「終の住処」観を聞いた。

—— 那須へ移住されましたね。

引越したのは今年の三月。参加型のサービス付き高齢者向け住宅で、入居者たちでつくる部会に参加して、自分たちで自立的にやっていくところです。平均年齢は七十三歳です。住人も個性的な人が多く、入居しても「終の住処」というよりも「出入り自由」という雰囲気。思い描いていた場所じゃないと出ていく人もいるし、新しい人もどんどん入ってくる。住人も、そういう自由な雰囲気がいいところだと思っっているところがありません。

—— ちょっと面白い住宅ですね。

## 家族介護ゆえの高藤

—— どういう経緯があったのでしょうか？

私は、両親の介護を通算二十年してきました。母が倒れたときは、まだ三十代。子供は小学生で、私はシングルマザー。介護保険も始まっていないときでしたから、介護のことなどまったくわからない。それでも、母を看なくてはならない、生活のために働かなくてはならない、子育てだって卒業には程遠いという状況の中で、無我夢中で過ごしていました。

—— 優先順位がわからない状態ですね。

家族の介護というのは、すごく難しく、親が倒れると自分の人生をすべて放り投げてしまう人が少なくないんです。介護と自分の生活のバランスをとるのがとても難しい。私はその典型で、母に介護が必要になったとき、それまでやってきた雑誌ライターの仕事や、事務所の立ち上げの準備などをすべてやめてしまったんです。

—— もちろん母はそんなことを望んではいませんでした。母は私を心配して、言葉がうまく出ない状態にもかかわらず、「あっちへ行きなさい」と手を振るんです。



●ひさだ・めぐみ 1947年生まれ。ノンフィクション作家。『フィリッペーナを愛した男たち』(文藝春秋)で、第21回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。主な著書に、『母のいる場所——シルバヴィア向山物語』(文藝春秋)、『シクスティーズの日々——それぞれの定年後』(朝日新聞社)など。

母が言いたいことはわかっていました。「私のことはいいから、あなたのやるべき仕事をしっかりやりなさい」と。母の願いは、私が仕事をして、自立して生活することだったのです。でも私は母を放っておくことはできませんでした。家族の介護は、常に心の葛藤を抱えるものなのです。ましてや親は存在そのものがとても大きい。でも現実には、介護を続けていると、先の見えない苦しさもありました。フリーで働く身では、生活も常に安定しません。友達も減っていき、不安はどんどん募りましたね。

—— 介護保険が始まる前だと、介護に関する情報がほとんどないですね。

母は、在宅で十年見た後、施設に入り、介護保険が始まるころ亡くなりました。父に介護が必要になったころに介護保険は始まり、サービスとして提供されるようになったんです。それでも家族の負担はそう変わりませんでした。どうして同じことをしていても、家族である私は無償で提供し、一方で、サービスを提供する「プロ」には介護保険で賃金が払われるのか、不思議な気分でした。介護を受ける側は保障されるようになったけれど、介護に回る側の家族はまったく保障